

序

序言

木村 自

2013年8月21日から22日の二日間、大阪大学において第7回国際セミナー「現代中国と東アジアの新環境」が開催された。本ブックレットに収められている諸論文は、同シンポジウム中の「大学院・若手研究者のセッション：21世紀の日中関係」での報告にもとづく論考、および議論を収録したものである。この論集刊行までの軌跡を、私の個人的な経験を出発点として記させていただきたい。

—

2012年9月17日、私は上海経由で昆明から帰国した。中国雲南省とミャンマーとの国境の町瑞麗で9月初旬から調査をしていた私は、こんな国はずれの町にも、尖閣諸島国有化が大きく影響しているのを感じていた。調査に訪れた家庭のリビングのテレビ画面には、航行する軍艦を背景に、日本と中国との軍事力の差を解説する軍人の姿がいつも映し出されていた。嫌な雰囲気だった。

9月15日に国境の町から昆明に戻ると、ここも嫌な雰囲気に包まれていた。中国人の友人は、屋外で日本語を絶対に使うなと忠告してくれた。昆明の繁華街の中心である南屏街の広場には、大勢の警察が繰り出していた。17日に大規模な反日デモが予定されており、大きな五星紅旗を翻した男が、広

場の真ん中に陣取っていた。道を走る車のフロントガラスには、五星紅旗と黒くバツ印がうたれた日の丸とが貼られていた。繁華街の宝石屋の宣伝文句は「钓鱼島是中国的，你是我的（尖閣諸島は中国のものだ，そして君は僕のものだ）」だった。できの悪い婚約指輪の宣伝だ。町全体に嫌な雰囲気が漂っていた。嫌な雰囲気の漂う中，9月17日早朝のフライトで関空に着いた。

帰国後も嫌な感じは心の中から去らなかった。誰かと対話したいと思っていた。対話を通して，この嫌な感じを誰かと共有したいと思っていた。この嫌な感じに言葉を与えたかった。言葉を与えて，心の中から「それ」を追い出したかった。そうしたなか，2012年12月22日，大阪大学の大学院生が中心となって，中国人学生と日本人学生との交流会が企画された。「中国人留学生と日本人学生によるフォーラム」である。語り合いたかったのは，私だけではなかったのだ。誰もがこの嫌な感じを何とかしたいと思っていた。若い大学院生が中心となって，小さな風穴をあけてくれた。嫌な感じが少し和らいだ。おそらく参加した中国人学生も日本人学生も，そして教員たちもそう感じだと思う。

二

このブックレットの元となった「大学院・若手研究者のセッション：21世紀の日中関係」も，嫌な感じに言葉を与えるこうした対話の一つとして，私の中では位置付けられている。「中国人留学生と日本人学生によるフォーラム」開催以降，21世紀の日中関係を担う若い大学院生・研究者諸氏相互の対話の機会を設けることができると考えていた。2013年8月に大阪大学で開催された第7回国政セミナー「現代中国と東アジアの新環境」は，そうした対話を進める絶好の機会に思われた。そこで，大阪大学法学研究科の田中仁教授を中心に，同研究科博士課程の鄒燦さんと人間科学研究科の潘鈺林さん，それに私の4人が集まり，大学院生を主体とするセッションを，同セミナーの中に組むべく準備を進めた。

国際セミナー「現代中国と東アジアの新環境」は，2007年に天津で開催さ

れたのを皮切りに、日本・中国・台湾の各地で毎年1回開催されている。これまでも、大学院生が議論に参加してはいたし、若手研究者の育成自体も同シンポジウムの主眼の一つではあった。しかし、大学院生が主体的な役割を果たしながら会議の運営に関与してきたとは言い難い。そのため、第7回の国際セミナー「現代中国と東アジアの新環境」では、大学院生にセッション一つ分の運営を一任し、21世紀の日中関係を担う若手研究者の立場から、自由に議論してシンポジウムにこれまで以上の活力を与えてほしいと考えた。本ブックレットをご覧いただければわかると思うが、その目論見はそれなりに成功したと言える。

参加者の選定に当たっては、天津南開大学の江沛教授、台湾東華大学の陳進金教授、大阪大学をはじめ日本の各大学で教鞭を取っている先生方に依頼し、適切な学生を推薦してもらった。報告者を公募制にすることも考えたが、シンポジウム開催までの時間が限られていたため、参加教員の推薦という形をとることになった。その結果、日本・中国・台湾のそれぞれの大学から19人の大学院生が応募してくれた。

参加者は歴史学をディシプリンとする学生が多いが、それ以外にも国際政治学や自然科学、考古学、人類学などを背景とする学生が集まっている。提出されたアブストラクトをもとに、テーマに沿って四つのグループに分け、そのグループを中心に議論を深めてもらった。それぞれ、「歴史」「政治・社会」「文化・科学」「認識・イメージ」である。こうしたテーマを中心に、日中間の対話の基盤と21世紀に向けた日中関係のあるべき姿とについて、ディシプリンや国籍、出身大学等の枠を超えて議論をお願いした。

三

さて、では日中間の対話の基盤と21世紀の日中関係のあるべき姿とはどこに見出すことができるのか。本ブックレット所収の論文について検討する前に、「嫌な感じ」に話を戻したい。尖閣諸島国有化後の日中関係のありように「嫌な感じ」を抱いているのは、もちろん私たちだけではない。日本全

国に散らばる中国研究者 150 人以上が、今日の日中関係の危機的状況に何とか介入しようと、2013 年 10 月に「新しい日中関係を考える研究者の会」を発足させた。政治的で、排他的なナショナリズムだけが先行するなか、日中関係について声をあげる研究者がいたことは、研究者の端くれとして非常に勇気づけられた。

「新しい日中関係を考える研究者の会」代表幹事の毛里和子は、今日の日中関係が抱える危機的状況を、相互対話の基盤が欠如していることにあるとする。一昔前の政治家は、相互に批判するにせよ称賛するにせよ、中国あるいは日本に対して何らかの思いを包有していた。ところが、政治家の世代交代が進む中、相互に共有されていた時代のエートスは徐々に失われ、何の思い入れもない者同士の単なる対立になってしまった。時代のエートスも対話の基盤も失われたなかで、健全な日中関係を築くのは至難の業であると。

それでは、失われた対話の基盤は、どこに再構築されるのか。毛里はまず、「排他的なナショナリズム」を批判のターゲットとする。日中両政府や日本・中国それぞれの大衆が、排他的なナショナリズムに走り、暴力的に日中間に横たわる問題を解決しようとする姿勢を批判する。そのうえで、こうした国家へと還元される安全保障ではなく、「アジアの人々の安全にかかわること」「生命の安全」を、共通のテーマに据えるように提案する。環境問題や人権、民主主義等、いわゆる「人間の安全保障」をめぐる問題への取り組みを共通の基盤として、両国の実務家・研究者、さらには政治家の間で一緒に取り組むことが、今後意識的に探るべき日中関係の方向性であると述べる。「住民、市民たちの安全についての問題をコントロールするのは、軍事とは別の安全保障になるはず」(*)だからだ。

四

毛里が提案する「人間の安全保障」という側面から、本ブックレットに収められた各論文を見渡してみよう。詳細は各論文やコメントに譲るが、論文の多くが日中間に横たわる「人間の安全」を議論していることが看取できる。

主にはつぎの三つのテーマが、議論の方向性になっているように思う。つまり、一つには「メディアと歪んだナショナリズムにかかわる問題」、二つ目には「法治と民主主義それにマイノリティの尊厳に関わる問題」、そして三つ目に「環境の変化が社会や文化にもたらす影響」である。

周妍論文で述べられているように、「社会的不安定をもたらしかねないナショナリズムは、21世紀に入ってからの日中関係を考える上で最大な問題となった。」(周 336頁)。ここで述べられているナショナリズムは、毛里の言う「排他的ナショナリズム」であろう。そして、こうした「排他的ナショナリズム」の産出には、メディアが大きな役割を果たしている。本ブックレット中、メディアをテーマに扱った論考は、鄒燦論文、馬瑞浩論文、王坤論文であり、広い意味では菊地俊介論文も加えることができるかもしれない。各論文が議論しているのは、日本あるいは中国のメディアが、ある特定の時代背景の下、報道内容を取捨選択して相互のイメージを構築していったことである。これらの論文が扱っているそれぞれの事例は、インターネットが情報を瞬時に拡散させる今日の世界において、非常に重い課題を突き付けていると言えよう。

法治や人権、民主主義、それにマイノリティの尊厳などについて議論しているのは、王慧婷論文、和田英男論文、それに楊靈琳論文である。いずれの論考も、ある集団への人間の包摂と排除を議論している。和田論文が扱うのは、「公民」と「人民」という概念が歩んだ包摂と排除の歴史である。「百花齊放・百家争鳴」からの風向きが変わり始めた1957年半ば以降、人々の包摂と排除を目的とした「人民」が幅を利かせるようになることで、権利と義務を有した自由な個人としての「公民」が徐々に消失した。また、王論文は、「反革命」というほとんど言葉遊びに近い概念が1920年後半から30年代にかけての国民政府内に跋扈しており、「反革命罪」が恣意的に人々を取り締まり得る法律として使用されていたことを示した。作家沈從文を扱った楊論文でも、包摂と排除が論考全体に通底するテーマだ。ここでは論文からの一文を引用するに留めたい。「排除される痛みを体験した沈從文が、苦痛と不公平な運命を改善しようとしたためであろう…。この三集団(軍人、売春婦、

苗族)は社会に発言権のない人々であり,排除される運命を訴え改善する機会すらない。沈從文は彼らの一員であり,かつ社会的に認められた作家の一人でもあるという二重の身分を活かし,彼らの世界を書くことで,今まで誤解や無知の対象であった彼らの真実を明らかにし,排除される運命から救おうとした」(楊 201 頁)。

今日の中国が,社会環境や自然環境の面で大きな変化にさらされているのは間違いない。そうした社会環境や自然環境の急激な変化にともなうて生じる社会や文化の変容を議論した論考が,潘鈺林論文,胡毓瑜論文,および陳元棧論文である。陳論文が議論するのは環境変容に伴う文化財の保護である。三峡ダムの建設にともなうて,白鶴梁の水文題刻は永遠に水没することになったが,その文化財を保存するための工夫と方途が,論文のなかで示される。胡論文が扱うのは,現代人の心理の問題である。教育環境の変化や高齢化にともない,中国においても多くの人々が心理的な問題を抱えて生活している。鬱病を含む心理的疾患を測定するための装置が議論される。潘論文は大気汚染,なかでも粒子状物質による大気汚染を議論する。今日の中国における環境汚染は極めて憂慮すべきものがあるが,そうした環境汚染を科学的なデータに基づき議論することの重要性が示されている。

ディシプリンを異にする論文が,いずれも「人間の安全や尊厳」を軸に議論されている。これらの議論を土台として,対話の基盤を築くことが求められている。

五

中国滞在中から今日に至るまで,ずっと「嫌な感じ」について考え続けた。この嫌な感じは何なのか。中国で反日デモに参加し,日本車を破壊し続けた中国人は,この嫌な感じを共有していないと思う。街頭でヘイトスピーチを続ける日本人も,この嫌な感じを共有していないに違いない。この嫌な感じは,どこかの国民国家のみに立脚して発言を続ける人には,たぶん感じ得ないものだ。ところが,私たちは国家の間を議論の出発点にし

ているからこそ、この嫌な感じを引き受けざるを得ないのだ。

間 にあることで生まれる嫌な感じとは何なのか。間 にある人々に嫌な感じを起させる力学は何なのか。間 を出発点とするような議論を生み出すことができたなら、私たちはこの嫌な感じをより積極的な方向に解消することができるのではないだろうか。間 に生きる若い研究者たちが、21世紀の日中台関係を見据えて対話し、「排他的ナショナリズム」と対決する場を、国際セミナー「現代中国と東アジアの新環境」は用意した。本ブックレットがそうした議論の出発点になれば幸いである。

* <http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20131129-00000019-scen-cn> (2013年12月4日参照)